



Title	新訊の魅力
Author(s)	濱田, 康行
Citation	農林経済, 9945, 1-1
Issue Date	2008-05-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/32947
Type	column (author version)
Note	巻頭言
File Information	hamada.pdf



[Instructions for use](#)

新訳の魅力

活字離れ、本離れが著しいのだが、ようやく出版業界もそれなりの対応を見せ始めたようだ。

最近、文庫本や新書版で特にそうなのだが、新訳が目につくようになった。日本は世界一の翻訳大国だから、世界中の主な古典・名著は日本語訳がある。しかし、ずいぶん昔に出版されたものが多く、実際、手にとってみると漢字が旧字だったり、文章が堅すぎたり、また中高年の読者には文字が小さく字間・行間がつまりすぎたりして、とにかく読みにくいのである。生まれた時から現代語に慣れている若い読者にはなおさら苦痛だろう。

このような潜在的需要に応じて登場したのが新訳である。古典新訳、と聞けば古と新が同居していて妙な響きもあるがこれが大当たり。最も話題になったのが、光文社のシリーズで、その第一号が『カラマゾフの兄弟』。青春時代に“挑戦”した人は多いだろうが、読み切るには相当のエネルギーが必要な大作だ。日本ではロシア語の翻訳者となると大家が数人おられて新しい訳者がこの壁を突破するのも難しい。当初の翻訳の出版から半世紀以上も経過して、ようやく“新訳”も許されたのだろう。感想を言えば、新訳は読み易かった。お陰で数週間、青春の頃に戻れた。

同じシリーズの中に『帝国主義論』もある。ドストエフスキーとレーニンが同じ枠に入ったのは史上初めてだろう。『帝国主義論』といえば日本では発禁にされそうになった事もある書物。著者のレーニンも冷忍と漢字表記された程。それが“無害”になったものだ。読んでみるとこちらも旧訳に比べてはるかに読み易い。学生の頃、いかめしい顔で、奉って読んだ頃より、著者の意図がよく理解できた。この書物のサブタイトルには“平易な解説”とあるが、若い頃はなぜ“平易”なのかよくわからなかったが、新訳のおかげでその謎も解けた。

PHP 文庫も古典の新訳を出版している。そのうちの一冊が『武士道』。札幌農学校の卒業生でもある新渡戸稲造が 1899 年に英語で著した本である。旧訳はいろいろあるが、弟子で後に東大総長になった矢内原忠雄のものが有名。このような大家の向うを張って新訳を出すのは勇気のいることだ。しかし、この勇気は報われている。新訳は読み易いのだ。110 年という長大な時を超えて、当時の第一級の知識人の日本への思いが伝わってくる。

紹介したのはほんの一部だが、これからも名著の新訳が次々と出されることだろう。それが、古典離れを、しいては日本人の読書離れを止めてくれるとよい。

『ノルウェーの森』の中で主人公ワタナベ君の先輩である読書家は「著者の死後 30 年を経ている作家の本は原則として読まない」と主張しているくだりがある。村上春樹氏の言うように古典とは「時の洗礼を受けている」ものだ。そして、それをよみがえらす新訳は現代の文化的テクニクなのだろう。